

## プロフィール

大学で中東地域文化を専攻。卒業後、在外公館派遣員として UAE, スーダン, イスラエルの日本大使館で勤務。英国の大学院で国際開発学（紛争, 安全保障及び開発）を修了後、外務省国際協力局にて対イエメン, レバノン, リビア, バルカン諸国及びその他欧州の開発援助を担当。平和構築・開発におけるグローバル人材育成事業の研修員として UNICEF スーダン事務所に派遣。現在、引き続き Humanitarian Policy Officer として同事務所で勤務。

### 1. 平和構築・開発におけるグローバル人材育成事業に応募した理由を教えてください。

紛争と開発に具体的な興味を持ち始めたのは、大学生のときにアラビア語習得のため、シリアとレバノンに留学したときです。当時のシリアは非常に平和で、物資面では豊かではないものの、コミュニティで食べ物や、喜び、悲しみを分け合い、外国人も寛容に受け入れ、自分の居場所を与えてもらったことに人間としての幸せを感じていました。一方で、レバノンに移った際、物資面ではシリアに比べて豊かであるのに、特に知り合う若者はお金や目に見えるものしか信用できない価値観を持つ傾向があり、その背景には長きに渡る宗派にもとづいたグループ間での紛争の影響があるのではないかなと思うようになりました。その地理的、文化的に近接している2カ国での経験から、モノを持つことが本当に人間の幸福なのかと疑問に思うと同時に、自分の中にあった「先進国が歩んできた道＝あるべき開発」という考えを崩されるきっかけとなり、暴力が人と社会に及ぼす影響、そして、そもそもなぜ人は暴力を使わなくてはいけないのかと問うようになりました。この経験と自分の育ってきた背景が重なり、自分の中で模索していくキーワードが「紛争／暴力」「宗教」「開発／幸福」に明確化された時期だと覚えています。

平和構築・開発におけるグローバル人材育成事業について知ったのは帰国後、何気なく「平和構築」「仕事」とインターネットで検索したときでした。応募条件が非常に困難に思え、「へー、こんな人もあるんやな」と自分にとっては縁遠いものだと考えていました。でも、自分でも思ってもみなかった紆余曲折を経て、目先のことを追って一步步歩みを進めるうちに、「もしかしたら」という気持ちになり、職場の同僚や留学中に会った友人が本事業の研修員であったこともあり、話を聞く中で応募に向けた具体的なイメージができるようになっていったので、その幸運にとっても感謝しています。

### 2. 国内研修に参加した感想は？

第一線で活躍されている講師陣はもちろんのこと、外国人研修員及び日本人研修員より、人道・開発・平和構築・紛争解決のフィールドで仕事をする上での知識、コーディネーションの手法、多様な文化での人間関係の構築等、実際に海外実務研修にて業務を行う上で役立つスキルを習い、また普段はなかなか話を聞く機会がない講師陣との対話がすごく楽しかったです。

個人的なハイライトは、ある想定された危機下においてチームでプロジェクトのプロポーザルを作るシミュレーションがあったのですが、ある外国人研修員と一緒にプロポーザルのイントロダクションを書くことになったときに、配慮を欠き、頭ごなしに修正点を言ってしまう、怒らせてしまう失敗をしました。環境が違うにも関わらず、自分自身が働いてきた職場の文化をそのまま当てはめていたこと、またどこかに傲りがあったことを深く反省し、非常に良い教訓となりました。その経験から、現職ではスタッフから自分に対してインプットをお願いしたり、もらった文書を修正したりする中で、密にコミュニケーションを取りながら、どういうことを主張したいのか、またどういった視点を考慮すればより良い文面になるのかを丁寧に説明するようにしています。

また、講師の方から教えていただいたことのなかで、特に印象が残っているのは公平性を保つことと「人」への焦点です。人道支援の調整を学ぶ一環で、緊急事態対応が必要な状況下で複数の団体が複数のキャンプへの支援をするシミュレーションを行いました。私は、現場で事業を実施する NGO の役割を与えられ、自分の担当キャンプの状況だけを良くし、組織の利益を優先させ、他キャンプとの調整はロジスティクス面など最低限にとどめるプランを作ったところ、ある講師の方から、「緊急事態化では争いをおこさないためにも、大切なのは人に焦点を当て、みんなに公平に支援が行き渡るようにすることだ」と意見をいただきました。人道・開発支援を行う上で、概念として当たり前のことなのですが、日々の業務に忙殺され、目先の目標、組織のマネートを追う中で視野が狭まってしまうときに思い出すようにしています。

そして何よりも、国連の面接のトレーニングや、キャリアアップ方法、国際機関や人道・開発分野で仕事を続けていく上での心持ち等、大切なポイントを約1か月強みっちり教えていただける機会は、国内研修以外にはないかと思います。

ちなみに、具体的に国内研修にどのような準備が必要でどのように取り組めばいいのか、イメージがわからないかと思います。講義の内容に沿ったリーディングリストはあるものの、特に予習が必要なのではありませんでした。そして、事業に応募される方は、各々の専門分野をお持ちだと思いますが、自分の知っている、あるいは専門性があるトピックにおいては、常に真摯に自分の知識や行動を問い直し、細かく疑問を整理していくこと、専門外であれば、講義の前に少しでも、枠組みや専門用語を予習していくと講師の専門的な話を楽しく聞け、国内研修で学んだ新たな知識を自分の血と肉にしていけるキーポイントだったのではないかと感じています。

### 3. 海外実務研修での活動について教えてください。

職務内容は多岐にわたるのですが、日本の企業や官公庁という総務としての役割を担っています。例えば、UNICEF スーダン事務所代表の応答要領作成、年間人道アピール作成、月例人道状況レポートの作成、ナレッジ（知識）管理、各種会議の実施・調整及び書記等、また、平和構築及び UNAMID（ダルフルの PKO ミッション）の撤退に伴う業務移譲の担当者として会議に出席したり、フィー

ルドや各専門部署からの意見集約、書類作成、本部や地域事務所からの依頼への対応を行っています。



在スーダン日本大使との共同モニタリングで西コルドファン州の急性栄養失調児  
治食センターに同行した様子。

スーダンは、北部や東部は開発フェーズにあり、西部及び南部は人道支援が主で、全体的に治安状況が改善傾向にあり、2017年には約20年にわたるアメリカの経済制裁が解除されるなど良いニュースはあるもの

の、いまだに280万人以上の栄養失調者、310万人の児童が学校に通えず、約490万人が生活に必要な水量が得られず衛生的な暮らができない厳しい状況で人々は暮らしています。また、ダルフルやコルドファン、青ナイル州の一部ではいまだに民族紛争が続いています。南スーダンでの紛争や食料危機に伴う難民の流入が続いており、現在、約75万人の南スーダン人（そのうち66%が18歳以下の子ども）がスーダンで暮らしている上に、エリトリアやエチオピアからの難民がヨーロッパに行くルートにもあたります。

その複雑な状況下で、スーダンは国連機関、ドナーやNGOが一体となって政府の能力強化や人々の暮らしを改善するため、2016年の世界人道サミットで採択された「人道、開発及び平和の連携」を進めており、私の担当としては、それに加え、持続的開発目標（SDGs）や、国連開発調整システム改革（通称：国連改革 UN Reform）、最新の難民協定に関する議論をフォローし、どのようにUNICEFスーダンの事業実施に政策を当てはめていくのか、逆にこれまでUNICEFスーダンで行ってきたことで、どの取組がその政策に当てはまるのか等、UNICEFの対応を代表や事務所幹部、各部署と相談した上で、文書に落とし込んでいき、進捗をフォローアップすることです。

現実には、デスクワークが主で、エクセル、ワード文書のコピー＆ペースト、既存の文書の整理、意見の違う同僚との調整等、成果を説明しづらい仕事が時間の大半を占め、フィールドで専門性をもってプロジェクトやプログラムの実施を先導する、あるいは本部で各国政府を相手に交渉するなど、世の中の人々がイメージする輝かしい「国連職員」像とは少々離れた地味な仕事かもしれませんし、どこの職場とも作業内容、プロセスに大差はないですが、大きな地図の中で自分がどこにいるのかを意識して、当たり前のことを当たり前にやることを意識しています。

#### 4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

頻繁に「本日中」あるいは短いときには「1時間以内」といった短時間でのインプットや資料の送付依頼がUNICEF本部や地域事務所、スーダン国連常駐代表事務所、人道問題調整官事務所（OCHA）等からあり、時間に制限がある中で関係部署、幹部と調整した上で代表の了解を得て打ち返さないといけないことから、日々綱渡りで歩いている気持ちで、朝起きて「今日は1日何も起きませんように！」と思うこともあります。

ただ、難易度が高ければ高いほど、新たな知識やものの見方が得られるときがあり、また UNICEF 内だけでなく、国際機関間のハイレベルの場に出席する機会にも恵まれ、アドボカシー、調整方法や共通のヴィジョン（Vision）を描くことを含めたリーダーシップの取り方を見ることができるなど、非常に貴重な機会や経験を得ています。そして、早急に上層部が考えていることを理解し、筋のとおった議論をするためには、普段より国連本部、ドナーを含めた最新の動向と政策の主旨、また事務所内でのモニタリングシステム等情報を集める上での足元の問題の改善を常に追っていく準備の大切さを感じています。

海外実務研修期間中に印象に残っていることは急性下痢症（Acute Watery Diarrhea）の対応プランの取りまとめをしたことです。2016年8月に発生し、一時期は抑えられていたものの、2017年4月より感染者数が急伸し、スーダン全土で合計約3万7千件の感染者と約800名の死者を出す事態となりました。感染者のピークが、多数職員の夏季休暇の時期と重なったため、取りま



UNICEF スーダン事務所幹部ワークショップ後の集合写真、3日にわたり事務所の年間をとおした重要課題について事務所幹部とその他シニアスタッフが白熱した議論を展開。その分、ノートを取るのが大変。

とめの担当が回ってきました。一から病気の原因、感染路、触媒となる要素を勉強し、保健、水・衛生分野、開発コミュニケーションの担当者を主とし、そのほかにも教育、子どもの保護、栄養分野の担当者と協力して、UNICEF がとるべき、シナリオ、対応プランを相談して決め、本部や地域事務所のアドバイザーより了解を得ていく2カ月に及ぶプロセスを経て完成させました。最後の方は、何度も様々なレベルや部署からの打ち返しを受け、精神的に参ってきている各部署の同僚に根気強く話をしながら、時間が限られた中、強いストレスとプレッシャー下で調整を行っていく良い経験となりました。

ただそれ以上に、一番よかったのは尊敬できる上司と、愛すべき同僚、スーダンの人々に恵まれ、疲れるときはあっても、楽しく仕事できたことです。

## 5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

これまで、東京ではドナーの本部からの紛争経験国支援、紛争経験国では首都レベルでの仕事を経験してきました。これから、しっかりと「人」に焦点を当てた支援を行う上で、いま自らに足りないのは現場を経験し、オペレーションの実情を知ることなのだと考えています。自分の経験を活かすためにも、紛争地で政策と現場を直につないでいく仕事、もっといえば紛争が行われている、あるいは発生リスクがある地域で人道だけではなく、予防を視野に入れた開発の種となる平和構築事業ができれば良いと思っています。

幸いにも、スーダンの紛争地域での「人道、開発及び平和の連携」のモデルケースとなる事業実施のため、国事務所からフィールドに移る予定です。将来的には、中東や北アフリカ地域を専門に、人々が平穏で安全に過ごせることをサポートできるプログラムを回せる立場になりたいと考えていますが、国際機関、その他開発機関、NGO、民間企業等の場所にはこだわらず、もっとも自分の力が人のためになり、支援を必要としている人が少なくなるために自らも新たな挑戦をしていける仕事をしたいです。そして、何よりも、後ろめたさを持たず、自分が楽しめることを一番大切にしたいです。

## 6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

様々な段階にいらっしゃる方が事業への参加を考えていらっしゃるのではないかと思います。

まだ、大学生あるいは、大学院に行かれる／行かれている方、社会人経験2年未満の方については、本事業だけではなく、JP0 や YPP、あるいは国際機関への直接公募、NGO、JICA を通した支援等、人道、開発、平和構築への貢献につながる道はたくさんあり、その中でこの事業は1つの道です。どのスキームへの応募条件も似ているので、目の前の仕事、学業を達成していく中で自らの興味と経験／強みを照らし合わせて、いろいろ見比べ、応募を考えるのが良いかと思います。

受けるか迷っていらっしゃる方、興味はあるけど「国連ってな・」って思っている方は、まず応募してみることをおすすめします。自分自身も、前職で国連機関とかかわる中で、そこに自分が飛び込んでいくことに迷いがありました。ただ最後の一押しになったのは、説明会でした。質疑応答で正直に迷いについて質問をしたところ、事業国内研修委託先の広島平和構築人材育成センター（HPC）の方や国内研修講師の方より、国連でのキャリアに執着するよりも、様々なフィールドで活躍できる平和構築人材を育てたい趣旨の回答をいただき、挑戦を決心しました。まず、考えすぎるよりも、経験してみることで道が開けるのではないかと思います。個人的な感想として、国連では、多様性、つまりは現地の文化、国連の文化を享受した上で、日本式の働き方は十分に通用します。コミュニケーション能力、さらにいえば人に耳を傾けてもらえるよう、論理を組み立てる力、そして話を真摯に聞く力さえあれば、英語が上手でなくても問題ないです。あと、抽象的であっても、「何がしたいか」を明確に持っている人ほど、1歩2歩先に行く良い仕事をしているため、組織に残ってほしいと上司や周囲から思われるケースを見てきましたので常に支援・仕事の目的に視点を置き、原理原則を自分自身に問い続ける大切さを感じます。幼いころから海外経験が豊富であったり、いわゆる「意識高い系」でなくても大丈夫です。地に足をつけて、こつこつと積み重ねたがんばりが評価される案外普通の仕事です。



スーダンの地方都市の上空写真、どの都市も大抵基盤の目になっている。そして砂漠。でもダルフルやコルドファンは雨期になると緑が多い。国土が広いので、出張は大抵飛行機移動。WFP や国連平和維持ミッションの定期便が飛んでいる。

最後に、この事業は1つの道だと述べましたが、事業への参加は国際機関、さらには平和構築分野でのキャリア形成にはかなり様々な面でアドバンテージがあり、その中で2点紹介いたします。1つは、ネットワーキングです。ハイレベルな講師陣と知り合いになることで様々な情報を得ることができるのに加え、違う場所で働いていても似た境遇で一緒に道を歩んでくれる同期の存在が砂漠のように心が乾いたときに、前向きな気持ちを与えてくれます。2点目は平和構築の文脈で先進性の高い職務を経験できる可能性です。この事業のポストの期間が1年で平和構築や開発にかかわる分野の職務という制約付きで、各国連機関にポスト作成依頼がされるため、私が所属する事務所では平和構築の文脈に沿うホットで挑戦的なトピックを担当するポストを出すことが多く、ほかの事務所でも同様にポストを作っているのではないかと想像します。力は試されますが、平和構築の分野で、挑戦的な仕事ができる可能性が多分にあるので、そういった希望を持たれている方におすすめです。